

早稲田大学
博士論文概要書

マルグリット・ポレートの『単純な魂の鏡』における
「滅却された魂」論
—意志と愛、知性と認識の観点から—

村上 寛
MURAKAMI Hiroshi

はじめに

マルグリット・ポレート (Marguerite Porete, 1310 年没) は、当時の神学者たちによって異端の烙印を押され、それにも関わらず自説を撤回せず、その思想を広めようとし続けたために 1310 年 6 月 1 日に火刑に処された女性である。

本稿は、哲学及び思想的側面からポレートの唯一の著作である『単純な魂の鏡』(*Mirouer des Simples Ames*) おける「魂の完成」について分析、解釈するものであるが、ポレートに、しかもその思想的側面にあえて注目し、論じる意義とはなんだろうか。

第一に、ポレートに対する異端審問が、当時の民衆による思想運動及び宗教的思想状況について研究する上で極めて貴重な事例であることがあげられる。『鏡』は異端の書として禁じられたにも関わらずその写本が現在にまで伝わる希少な事例であり、審問記録に残されているような歪められた思想ではなく、本人の言葉によってその思想状況について再検討する貴重な手がかりとなる。ポレートに対する異端審問及び当時の民衆宗教運動との関係性については、本稿の第一部で論じていく。

ポレートの思想について論じる意義としては、第二にその特異な意志概念をあげることが出来る。『鏡』では「意志の滅却」が魂の完成における一つの重要な契機として描かれているが、そこでは伝統的なキリスト教思想を踏襲しつつも独自の観点が加えられた極めて興味深い意志概念構造が示されており、中世という文脈を越えた普遍的な意志概念についての理解に資するものであると思われる。意志の問題については、特に第二部で集中的に扱う。

第三に、その極めて興味深い知性概念理解があげられる。『鏡』では人間の知的活動において、特に理性 (raison)、知性 (entendement)、認識 (cognoissance) が重要な意味を持つが、それぞれが魂の完成へと至る過程及びその成就において相互に関連しながらそれぞれの役割を果たしている。ポレートの知性認識構造及び魂の完成におけるそれぞれの知性的働きの様相については、第三部で検討する。

以上のような見通しのもとに、本稿は『鏡』で語られる「魂の完成」における「滅却された魂」について検討し、その意志概念及び知性概念理解に光を当てることでより全体的なポレートの人間理解について明らかにすることを目指すものである。

第一部 ポレートの身分と異端問題

第一章 ポレートと『単純な魂の鏡』

ポレートは現在のフランス北東部、エノー (Hainault) 出身の女性である。彼女の著作である『鏡』は古フランス語乃至中世フランス語で書かれた書物で、基本的に擬人化された諸概念による対話形式によって進められている。『鏡』はポレートの生前からすでに多数の写本が作られており、異端宣告を受けた後も著者不明の書として各国語に翻訳され、広く読まれていたことが知られている。

第二章 14 世紀初頭までのベギン運動

ポレートの身分について、また「異端」との関連について論じる上で最も重要な要素となるのがベギン（Beguine）である。ベギンとは、特定の修道会に属さず、在俗の身で一人乃至少数で敬虔な生をおくことを目指した女性たちの総称だが、その生活形態や思想について様々なタイプを含んだ、曖昧な呼称であると言える。しかし、それではポレートが裁判記録の中で「ベギン」と呼ばれ、20世紀以降の関連研究でも「ベギン」と呼ばれていることについて、どのように判断すべきなのだろうか。また、ベギンを巡る異端問題にポレートはどのように関わっているのだろうか。

ベギンという概念は時代と場所によってかなりの振れ幅を持つ概念であり、ポレートがベギンであったのかどうかという問題については、彼女の具体的な生涯が伝わっていないため、その生活形態から判断することは出来ないが、『鏡』に含まれる思想及び主張から判断することは可能であるように思われる。というのも、ポレートはベギンたちと何らかの対立乃至不和を思わせる記述を残しているからである。ポレートが念頭に置いている「ベギン」たちは、おそらく北部低地地方のベギンたちだが、彼女たちの多くは共住体の中でそれぞれの規約に従いつつ敬虔な生活を営んでいた。しかしポレートはそのような生を否定的に捉える。というのも、一つには、清貧や断食、苦行といった自然本性的欲求、欲望の節制が理性の支配によるものであるとした上で、そのような理性に支配される生を劣った生と見なすからであり、また規約それ自体、より具体的に言うなら人間が定めた慣習的善や慣習的悪が、人間相互の関係性によって規定された、本質的には根拠を持たないものであって、真に神によって規定されたものではないと考えるからである。

第三章 「ベギン」としてのポレート

では、ポレートが異端判決の中で「ベギン」とされたのは何故なのだろうか。一つはベギンという呼称自体の曖昧さ、多義性による。在俗で神学的問題に取り組み、魂の完成を目指しつつその思想を広めようとする態度は、思想的に一致するかどうかはともかくとして、放浪托鉢し、説教するベギンたちに重なるものだと見なされえただろう。また、14世紀初頭にかけて高まっていたベギン批判の中で、ベギンたちに異端思想が蔓延していることを示す代表的な思想として意図的に両者が結びつけられた可能性もあげられる。ベギンたちの異端思想を断罪する教令で列挙されている内容のいくつかが『鏡』に由来することは確かであり、結果的に彼らがポレートとベギンを結びつけていることは間違いない。つまり、『鏡』の思想がそのような教令において「ベギンの思想」として採用され、それによって、一つの実体のない異端概念の核が形成されたのである。つまり、ベギンであるポレートの思想がベギンの異端を断罪する教令に引用されたのではなく、ポレートをベギンであるとすることによって「ベギンたちの異端的思想」が具体化されたのである。

第四章 異端判決引用文に対する解釈

ポレートの「異端問題」について考えるためには、神学者たちによる審問によって『鏡』がどのような論理構造において「異端」とされ、その判断が論理的に妥当だったのかについて明らかにすることが重要である。

『鏡』に対する最終的な異端判決では15箇所が異端箇所として指摘、引用されたとされているが、その具体的な内容について我々が知りうるのはその内の三つであり、それぞ

れ徳理解、自然本性理解、意図乃至意志理解を巡るものとなっている。

断罪された徳理解を巡る主張では、ポレートが徳の否定、それどころか何が徳であるかは一定の完成の段階に至った魂の「指示」(ad nutum)に応じて決まるという傲慢かつ独善的的な主張を行ったものとされているが、『鏡』で語られる諸徳と魂との主従関係について理解すれば、ポレートが必ずしも徳を否定していないことは明らかである。一定の完成の段階に達した魂は「諸徳に暇乞いを告げる」とされるが、そのような魂は諸徳を放棄するのではなく、魂の内で働く神に秩序付けられて在ることで諸徳と共に在るのである。

異端とされた、自然本性の無制限な肯定を認め推奨しているものと見なされる主張では、裁判記録が「自然本性が求めるものを何でも自然本性に与えることが出来るし、与えるべきである」となっているのに対して、『鏡』では「自然本性が必要とするものを」となっていることが重要であると思われる。すなわち、一定の完成の段階にある魂の自然本性は、愛によって、また必要性によって秩序付けられ、維持されることが相応しいと考えられているのである。

意志乃至意図の理解を巡る主張では、魂が神の慰めや賜物を軽視し、否定すべきであるという主張と解釈されうるものとなっている。しかし、ポレートは慰めや賜物自体を否定しているのではなく、それを目的とすることを否定しているのである。異端判決引用文では、魂の一切の意図が神を巡るものであるゆえに、慰めや賜物を気にかけることがないと言われるが、それは一切の意図が神を巡るものになったその時、そのような魂はもはや神自身ではない如何なる対象をも神へと向かう手段や過程として意図する必要がないし、また意図すべきでもないという主張と理解されるべきなのである。

第二部 意志概念と愛

第一章 魂の辿る七つの状態と第五の状態における変容

『鏡』では、滅却された魂が意志を持たないことが何度となく繰り返し主張されているが、何故意志を持たないことが必要とされるのだろうか。そのような疑問に答えるためには、『鏡』における意志概念の構造及び、「滅却された魂」(ame adnientie)における意志の在り方について明らかにすることが必要となる。

「滅却された魂」は、魂が完成に至るまでに辿る七つの段階のうちの第五段階にある魂とされている。第四段階までの魂は、世俗の価値連関を離れ、自らの意志によって主体的に神に向かって上昇するが、そのような上昇を、自分の能力による功績であると考えてしまう。それゆえに第四段階は「魂を愛の豊穡さの内を高慢にするのです」と言われるのだが、第五段階で魂は真の認識に至り、自分自身が「全くの悪である」ことを認識する。というのも、存在するものは神に由来するものであり、従って善であるのに対して、魂がその固有性において持つ存在は真に神に由来するものではないがゆえに真に存在するものではなく、真に存在するものではないがゆえに悪だからである。

しかし悪であることはまた救済の条件でもある。悪は無であり、無所有であるが、「より貧しき者には施しを与えるべき」であるために、最も富む者である神はその善を、存在を与えずにはいられないのである。魂はその悪の度合いに応じて善を与えられる。つまり

一切の悪であるがゆえに一切の善を持つ魂は、「愛の変容」によって、存在である神にのみ正しくその存在の根拠を持つものとして、悪であり無であることを根拠として、ただ神のみが存在するというそのことにおいて無なるものとして全面的にその存在に参与するようになるのであり、それが「愛の変容」によって成立する事態であり、「愛への変容」なのである。

しかし、『鏡』において愛と言われる場合、そこには二つの層が見られるように思われる。すなわち、神である愛と、愛することという働きとしての愛である。「愛の変容」と言われる場合の愛は、つまり意志としての、働きとしての愛であり、魂は神である愛それ自身になるわけではないのである。

第二章 意志概念

ポレートの意志概念理解及び自由意志についての理解は『鏡』における中心的な問題の一つとして研究されてきた。しかしこれまでの研究では、ポレートの意志概念、特に自由意志 (*franche volonté*)、意志 (*voulneté*)、そして意欲 (*vouloir*) を巡る用法と理解が適切に為されてきたとは言い難い。

ポレートの自由意志理解はクレルヴォーのベルナルドゥスによる自由意志理解の影響のもとに成立しているものと思われるが、ベルナルドゥスは自由意志のみが恩寵を受け取ることが出来ること、また自由な能力であるところの意志によって恩寵に同意することで、その自由意志によって主体的に恩寵と協働することが出来ることを述べている。

それに対してポレートはベルナルドゥスがそうであるように、自由意志があるなら意志の行使がありうること、そして罪に関わる選択可能性が意志の行為であることを示し、同意が意志によるものであること、そして意志の行使が自由と密接な結びつきを持つという理解を示している。

しかしポレートの場合、意志と意欲が明確に区別されていることにより注意する必要があるだろう。滅却された魂が全く意志を持たないと言われているにも関わらず、魂が神の意志を持つことを意欲すると語られているように、意志と意欲は明確に区別されている。すなわち、意志は個々の選択判断及び同意を可能にするある種の能力、原因であり、意欲とはそのような意志の個別具体的な働きとしての様相、或いは何らかの対象への動的な持続性であると考えられているのである。従って、滅却された魂が意志を持たず、しかし意欲するとは、自分自身に固有の意志が滅却されることで自分自身の意志に由来する意欲は存在しなくなるが、意志において無であることによって神の意志と一であり、神と一である意志によって一つの意欲を持つ状態を示すものである。そのような魂は、自分自身の意志なしに、魂の内でも魂に意欲させる神の意志による、働きとしての神の意欲を同時に自分の意欲として働くようになると考えられているのである。

しかし意志と意欲に関するこのようなポレートの理解は、同意が意志によるものだと考えられていたことと矛盾しないのだろうか。そのことは、同意が魂自身の意志によるものであると同時に、自由意志によるものであることを理解すれば明らかである。すなわち、魂は自分自身の意志によって何らかの個別的な選択や判断に同意するのではなく、自分自身の意志なしに、しかしむしろそのことによって全面的に開かれている自由意志において神の意志に完全に同意することで意志において神と一であり、一なる意欲を働くのであり、

真に自由なのである。

また、意志と愛を巡るポレートの思想については、これまでサン＝ティエリのギョームの思想による影響が指摘されてきた。実際、神の意志としての聖霊が魂に注ぎ込み、一をもたらすという構造はギョームの言う霊の一致 (unitas spiritus) の思想と通じるものであり、霊の一致が聖霊それ自身であると言われていることについても同様である。しかしギョームがそのような一致の根拠を、人間が神の似姿を持つものであることに由来させているのに対して、ポレートが根拠としているのが魂の無性であること、またギョームが神との一について、それが三位一体における聖霊との霊における一であることを強調するのに対して、ポレートが聖霊の役割を明確に強調せず、むしろ神との一であることを明言する点に両者の差異が示されている。

愛の知 (L'Entendement d'Amour / intellectus amoris) を巡る両者の思惟も、愛を真の知と見なす点において両者に強い思想的親近性があるものの、ギョームの愛、知が人間の側からの働きでもあるのに対して、ポレートのそれはあくまで魂の内で魂の働きのなしに働く神の働きである点において、両者の思想的差異とポレートの思想的特徴を見ることが出来るだろう。

第三部 知性認識とその構造

第一章 「女性神秘家」における理性と経験

特に初期のベギンたちが理性的手段による神探求を重視しなかった最たる理由は、理性が愛との対比において限定的能力と捉えられたことによる。何故愛に基づく行為に対して理性に基づく行為がより劣った行為と見なされるのだろうか。愛が神に通底し、神に至りうる、神に根拠を持つ力であるのに対して、理性が被造的世界に限定された能力と考えられるためである。

ハデウェイヒにおいてもやはり、理性は被造的事物に基づく認識に限界付けられた能力として愛に劣る能力と見なされているが、一方で愛と相互補完的關係にある能力とも捉えられている。すなわち、特に「照明された理性」(verlichte redene) と呼ばれるような理性の場合、単なる論理的思考力や推論能力としてではなく、むしろ余計な事象に惑わされることなく本質を直接知ることの出来る、神に与えられた人間の純粋な知的能力として捉えられているのである。

それに対して、ポレートの『鏡』における理性への評価は、一見苛烈なまでに否定的である。「理性」は「粗野なことしか理解せず」、理性に従う人々は愚かなロバであるとされる。というのも、理性は被造的世界における事物との関係に限定された認識、判断能力であり、またそれによって形成される形骸化した社会的規範による価値判断と見なされるからである。

またポレートは、理性の「探すこと」という本質を批判する。何故なら、神が理性を超えた、理性によっては把握し難い対象である以上、探すことそれ自体が未熟な行為だと見なされるからである。理性の批判は登場人物としての「理性」の死へ至るが、それは理性の放棄ではなく、理性と魂という主従関係の逆転として理解すべき事柄である。はじめ理

性と諸徳に仕えていた魂は、理性が命じ推奨することをあらゆる犠牲を払ってでも実行しようとしていたが、愛がそのような魂を支配するようになったとき、理性が逆に魂に仕えることを望むようになるのである。

第二章 知性と認識

理性に対する批判的態度はしかし、知性的活動そのものが否定的に捉えられていることを意味するわけではない。

前章で確認したように、魂がより高い段階に至るために必要とされる理性の死は、しかし能力としての理性の放棄ではなく主従関係の逆転であった。すなわち、「理性」の支配から解放され一定の完成の段階に至った魂は、感覚に基づく間接認識能力の内にそれを超えた直接的知性認識能力を同時に持ちうるのである。しかし如何なる知性も、神的愛の富を手に入れることは決して出来ない。魂は「神の内にあつて自分の知性の内にあるよりも、私の知性を超えた神の内にあることをより愛する」からである。

知性を手段とすることによっては完成の段階へと至り得ないにも関わらず、滅却された魂が「全てを知りながらまた何も知らない」と言われることは、しかしどのように解釈すべきだろうか。そのことは、知性 (*entendement*) が知解された内容或いは理解という意味でも用いられるのに対して、認識 (*cognoissance*) が固定的な情報の獲得というニュアンスを持つ、獲得しまた与えられうる認識であるということによって導かれる。すなわち、魂は自分自身の認識を取り去られることで、神によって与えられる「偉大な認識」を持つようになるが、魂は自分自身の知性的働きによって自分自身が無であるという認識に至るのではなく、自分自身の認識が取り去られることによってのみ、自分自身が無であるという認識を持ちうるのである。認識が「魂の総和 (*la somme*) であり」、魂それ自身の存在様態であるという理解から導かれるように、ポレートは人間が通常の意味で獲得し、それによって形成される知識乃至認識に基づいて個別化され、そのような認識が実体において、各々の知性によって形成されるものであると考えているが、このような知性構造理解に基づくなら、認識の形成そのものが排除された状態こそが、「無の認識」に他ならないことになるであろう。

従って、滅却された魂は、神について何も知らず、知り得ないが、自分自身が全くの悪であり無であるということによって至る、存在様態としての一つの認識によって神的認識を与えられ持つようになる。しかしそのような認識は、魂の総和としての無であり悪であるという認識を保持する限りにおいてのみ持ち続けることが出来る認識なのである。

おわりに

本稿第一部でポレートの身分及びその社会的状況について、そして異端者として断罪されたその論理的根拠と曲解について論じたことから明らかに通り、ポレートの思想が同時代の人々をはじめとして多くの人々に正しく受け取られてきたとは言い難い。しかし、特に意志と自由意志理解について、ポレートが人間における意志概念構造への深い理解と体系的認識をもって、魂の完成とそのような状態へと至る根拠及びその様相について語っていたことは、本稿第二部で論じた通りであり、しかも意志と愛の働きについて強調する

だけではなく、知性概念及びその構造についての根源的な洞察によって、その知の在り様についても意識し、理解していたことは本稿第三部で確認してきた通りである。

滅却された魂は確かに主体的な意味で意志を働かせることも、理性に従うことも、知性を働かせることもない。しかしポレートは、このような意志概念や知性概念のもとに、魂の完成について人々に伝え、そのような状態へ可能な限り導こうとしたのである。